

清華大学蔵戦国竹簡『保訓』文字字形考

A study on the script form of Qinghua Bamboo Slips 'Bao Xun' (The Admonition of Protection)

中村拓也
Takuya Nakamura

はじめに

今日、「簡牘」と総称される木簡や竹簡に書かれた肉筆資料の研究が急速に進められている。これまで不明であった古代の文化・思想・経済・軍事といった新たな事実が明らかになることは勿論のこと、書法的な面においては各年代に沿って文字の変遷を窺うことができる。今回取り上げる清華大学蔵戦国竹簡もその一例であり未だ研究が引き続き行われている新出土の竹簡である。

現在、『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』(『柒』)(清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局)として分冊方式で刊行されており、着実にその全容が明らかにされつつある。

先行研究

福田哲之氏の『清華簡(壹)』(陸)の「字迹分類」(『清華簡研究』(湯浅邦弘編、汲古書院)より当時発表されていた清華大学蔵戦国竹簡(以下、清華簡と記述)を書法様式、判別字の二つの分類基軸を設け、それぞれの観点から各篇を字迹分類した論考である。その字迹分類については、各冊の出版にともない、李守奎氏(対象冊:壹)、『貳』、羅運環氏(壹)、『参』、李松孺氏(壹)、『肆』、賈連翔氏(壹)、『伍』などの研究がすでに発表されており、その分類を踏まえながらも書法様式の観点から第Ⅰ～Ⅲ類に大別されている。第Ⅰ類は現地性文献と共通した楚系様式。第Ⅱ類は筆画の構造から楚系とは地域を異にする晋系様式。第Ⅲ類として唯一分類された一篇である『保訓』

は、その書法様式に対して通常の筆写に用いられる俗体とは用途の異なる、あらたまった場に用いられる正体に近い様式とそれぞれ位置付けている。

この書法様式の種類においては横画を中心にそれぞれ特色が述べられているが、細微な筆法にまでは言及されていない。

拙論では、この唯一第Ⅲ類に分類された『保訓』についての筆法を更に深める為、その他の戦国楚系簡牘と比較し、用筆法の分析を行いその特異性を明らかにしたい。

清華大学蔵戦国竹簡について

二〇〇八年七月、大量の竹簡を清華大学の卒業生である趙偉国氏が母校に寄贈した。『清華簡』と略称された竹簡群は、第一次調査の結果、二千余枚からなる戦国時代の竹簡であることが判明した。近年公開され注目を集めている他の竹簡の分量をはるかにしのぐものであった。

竹簡の一部にカビが生えるなどの劣化が見られたため、清華大学では、ただちに洗浄と保護の応急処置にあたった。その後中国国内の研究者をあつめた竹簡鑑定会の結果、これらが間違いなく戦国時代の竹簡であるとの評価を得たのである。

更に、C一四年代測定が行われ、その結果、清華簡の年代が紀元

前三〇五年前後三〇年であることが判明し、先の鑑定結果を裏づけることとなった。郭店楚墓竹簡や上海博物館蔵楚簡といった戦国時代中期の竹簡と同時期の竹簡であることが科学的に証明されたのである。

簡の内容は多岐にわたっており、ここでは一部であるが、『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』に収録されているもののみを紹介する。『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』には『尹至』『尹誥』『程寤』『保訓』『耆夜』『周武王有疾周公所自以代王之志(金縢)』『皇門』『祭公之顧命(祭公)』『楚居』の九篇が収められている。

以下、文献の内容について草野友子氏、中村未来氏による『清華簡(壹)』(陸)所収文献解題』の第一分冊所収文献(九篇)より『保訓』について引用にて紹介する。

『保訓』

整理者は李守奎氏。篇題はなく、内容に基づいて『保訓』と名付けられた(「保」は「寶」に通じる)。

本篇は、周の文王が太子発(後の武王)に対して遺訓を告げるといふ内容である。文王は太子発に二つの伝説を語り、太子が遵行すべき一つの思想観念「中」を説明している。一つは、

舜に関するものであり、舜がどのように「中」を求めたかについて述べられている。もう一つは、殷の湯王の六代祖先である上甲微に関するものであり、微は「中」を河伯に借りて有易に勝ち、その「中」を子孫に伝えて湯王に至り、湯王は天下を保つたとされる。文王はこの二つの事例を挙げ、慎んで怠ることがないようにと太子発を戒めている。

本篇は、『清華大学藏戦国竹簡(壹)』の刊行以前に釈文が先行公開された(初出は『文物』二〇〇九年第六期)。特に「中」の解釈については、多くの研究が発表されている。

『清華大学藏戦国竹簡(壹)』には、説明として以下のような文章が記載されている。

《保訓》全篇共有十一支簡、完簡長二十八・五釐米、編痕上下两道。簡文頂頭書寫、簡尾大都留一個字距的空白。每支簡二十二至二十四字。其中第二支簡上半殘失約十一字。《保訓》内容是記周文王五十年文王對太子發的遺訓。文王對太子發講了兩件上古的史事傳説，用這兩件史事說明他要求太子遵行的一个思想觀念——「中」，也就是後來所説的中道。第一件史事是關於舜的，講的是舜怎樣求取中道。第二件史事是關於商湯的六世祖上甲微

的，講微假中於河伯以勝有易，微把「中」的内容「傳貽子孫，至于成湯」，於是湯得有天下。自《保訓》圖版與釋文初稿在《文物》二〇〇九年第六期發佈以來，研究成果十分豐富，限於本整理報告體例，不一一引述，特此鳴謝！
これを訳すと、

『保訓』は全編全て十一本の簡がある。簡の長さは二十八・五センチで編み跡は上下二箇所。簡の文は一番上から書き、簡末にはほとんど一字の大きさぐらいのスペースを残している。毎本二十二字から二十四字が書かれている。其の内の二本目の簡の上半は十一字ぐらいが失われている。『保訓』の内容は周文王五十年に文王が太子に賜る遺訓である。文王は太子に二つの上古の物語を話し、この歴史の物語により、太子に一つ觀念を求めた——「中」である。即ち後に言う「中道」である。一本目の物語は舜に関する話であり、舜がどのように中道を求めたかを講じている。二本目の話は商湯の六代目祖先の上甲微に関し、上甲微は河伯族の兵隊を借りて有易に戦勝し、上甲微は「中」の内容を「子孫に伝貽し、成湯王に至る。」、それ故に湯王天下を得たと語っている。

『保訓』の図版と釈文の初稿が『文物』で二〇〇九年の第六期に発表した以来、研究の成果は豊富であり、この報告の体例に限っては、各々述べず、感謝する。

引用文、また『保訓』について詳細に述べたが、この篇の内容の観点から、他の篇にみられる通常の通用体ではなく特別な意図を持って書かれたという根拠が窺えるのである。福田氏によればこの篇には周の文王の遺言が記されているのである。その当時からその認識がなされており、権威づけという点において正式な様式を使用したと推察される。

字形・字体考察

楚系文字の特徴として、総じて字の傾斜は右上がりであり、右回転の円転のリズムで運筆されている。また、日常の通用体の早書きによる匆卒な書き方で丸みのある扁平な字形も特徴的である。まず特筆すべきはこの『保訓』には清華簡の他の篇と比べても右上がりの文字のような傾斜が見られず、文字が真正面を向いているのである。先述の書法様式に照らし合わせてみると、明らかに楚系文字の一般的な様式には該当しないのである。『保訓』はその字体の特異性からやはり第Ⅲ類に分類されるということである。字例が多い文字を抽出したものが図1である。

図1 王



命

 程藩 03

 保訓 08

 保訓 03

 保訓 02

 香夜 02

 金騰 04

 金騰 08

 金騰 02

 金騰 13

 皇門 04

 皇門 03

 祭公 03

 祭公 03

 祭公 10

 祭公 03

 祭公 03

自

 尹至 01

 尹至 03

 尹誥 01

 保訓 01

 保訓 04

 金騰 06

 金騰 10

 金騰 14背

 皇門 03

 皇門 10

 祭公 17

 楚居 03

 楚居 06

 楚居 07

 楚居 07

 楚居 03

弗

 尹至 02

 尹至 03

 程藩 03

 保訓 03

 保訓 08

 金騰 02


 皇門 03

 皇門 03

 皇門 08

 皇門 10

 祭公 03

 祭公 03

この五文字を抽出するにあたり、『保訓』を含め他の四篇以上であることを条件とした。ここからは更に細かな筆法に関して『保訓』篇の十一簡の一字一字を他の楚系簡牘と比較考察を行い如何にその文字が特異であるか検証する。この際、合文、または他の楚系簡牘の文字例が極端に少ない文字等は考察の対象外とした。また『保訓』篇内にて字例が何例もある場合は、初出の場合に併せて考察するものとする。

以下、『清華大学藏戦国竹簡(壹)』より転用したそれぞれ第一簡から第十一簡の積文であるがこの順序に従って考察を進めた。

- 佳王辛_二年不瘵王念日之多禹志述保訓戊子自澳_二己丑香【一】
- 若日發艱疾壺甚志不女及【二】
- 訓昔寿人連保必受之以調今艱疾允瘳志弗念父女以箸【三】
- 受之欽才勿淫昔叁舊爰火_二親勸于鬲茅志救中自詣季志【四】

不諱于庶萬膏之多欲阜又改于上下遠執廼易立執詣測〔五〕
 会鳩之勿咸川不諱叁既曼中言不易實兎名身茲備佳〔六〕
 允翼三不解甬乍三隆之惠帝先嘉之甬受阜緒於虐備之〔七〕
 才昔兕段中于河以遠又三易三怀阜皇兕亡善廼追中于河〔八〕
 兕寺弗忘連飢孫三至于成康備備不解甬受大命於虐發敬才〔九〕
 驗駢茲不舊命未又所次今女備備母解元又所直矣不〔一〇〕
 及尔身受大命敬才母淫日不足佳個不兼〔一一〕
 他の楚系簡牘との用筆法の比較

『保訓』は全十一簡で構成されるが紙面の関係もあるので、ここでは前半の三簡に限って考察し、残りの簡に関しては稿を改めたい。比較対象である楚系簡牘は『楚系簡帛文字編』（滕壬生編・湖北教育出版社）より楚系文字の一般的な字例、また『保訓』に類似した字例を抜粋した。

・第一簡

「佳」



新甲三・一五・六〇

□—淥(蕩)栗志(恐)臞(懼)



帛乙六・一〇

—患匿之哉

楚系文字では散見出来ないような文字である。一般的な字例は下段の二文字のような字形構造になるが、『保訓』においては鳥の金の書体を髣髴とさせる書きぶりである。また、起筆はしっかりと藏鋒で書かれていることが見て取れる。

「王」



望一・一一二

□折—各哉牛



新甲三・五

以逾訓(順)至文—

横画は起筆で藏鋒の入筆のまま、線の太細をつけないよう慎重にかつゆつくりとした運筆となっている。少しの線の揺れはあるもの

の、一貫して水平を意識しているのであろうか重厚で安定感がある。その他の楚系簡牘ではやはり右上がりが強くと上反りの線が一般的である。

「年」



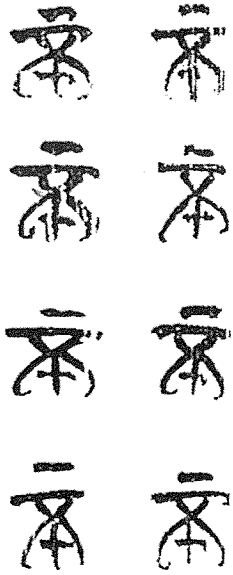
包二・二二七
障一



郭・窮・五
行一七十而膳(屠)牛於朝訶(歌)

字形の違いがはっきりと表れている文字である。明らかに筆画の省略が見られる。起筆の打ち込みの違いは明らかで、収筆までしっかり力を抜かずに運筆されている。

「不」



帛甲五・五
九州一坪

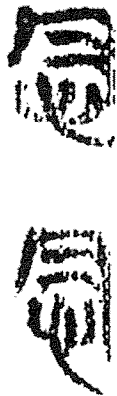
包二・五三
量庶下之賁



郭・老丙・四
往而一害

「不」は他の楚系簡牘に多数の字例がある。一画線が多くなるような繁化の文字も多くみられるが総じて他の楚系簡牘は文字が前傾で右上がり特徴的である。また出来るだけ左右対称に書かれている文字構造も楚系文字として特異である。

「念」



郭・語二・一三
怀生於一

二画目において書き出しから水平に線を引いたのちに長く縦画を

書いている。この字形構造は一般的な楚系文字の場合、円転のリズムで丸みを帯びた点折になるが水平を保とうという意図がはっきりと表れている。

「日」



包二・二一八
己酉之

郭・語三・五二
膳(善)一過(化)我

「日」は楚系簡牘では右肩の点折部を一画で書く字例が多い。しかし『保訓』の字例では筆画からは確実に点折を二画で書いている。また『保訓』に似た中心の線を点に近い形で書く字例が見られたが、しっかりとした点として書かれているという点においてはやはり特異であろう。また縦一画目の入筆や点折部の起筆はその形状から臆鋒で書かれているとみて間違いない。

「之」



郭・語一・一〇六
虜(皆)又(有)

包二・七
王廷於藍鄂一遊宮

九・五六・一
敵稱一五擔(擔)

望二・四七
一丹緞一因

字例からもわかるように楚系簡牘において最終画の横画は右上がりである。それまでの三本の縦画の角度に差異は認められるが、『保訓』のように入筆を臆鋒で書いた縦画は見られなかった。この起筆は特異であり注目すべき点である。

「多」

郭・老甲・三一

親(盜)側(賊)——多又(有)

包二・二七二

——鞏絨經緯純

「多」において右肩の点折は二画で書かれている。楚系簡牘では円転のリズムのまま一画で書かれており、その丸みを帯びた線はやはり『保訓』とは明らかに違いを見て取ることができる。入筆は藏鋒にて重厚に書かれている。

「述」

郭・性・一四

術(道)四——(術)

新甲三・三七九

□——、鋤於係豎一□

文字の水平を意図しているのであろうか『保訓』の字例はしんにような最終画が右に下がっているのである。一般的な楚系文字のしんにような円を描くように丸みがかった線になるのであるが敢えて

そのまま円運動を抑えながら抜いているその用筆法は見逃せない。

「保」

郭・老甲・三八
不可長——也

信一・〇四
相——如茶

包二・二一八
——象

「保」であるが、他の楚系簡牘の中では見られないにんべんの字形が見られる。このにんべんの字例は清華簡の他の篇でも見られることのない特異な形である。また先述の「日」と同じように傍の一面目は一筆ではなく分けて書かれているということが読み取れる。

「訓」

新甲三・五
以逾——(順)至文王

郭・性・二七
其出内(入)也——(順)

「訓」であるが字形構造そのものは他の楚系簡牘と類似しているが、明らかに文字の傾斜は異なっている。これは右上がりの傾斜を意図的に抑え書かれており、『保訓』の特異性の一つとして挙げら

れる。

「戊」



包二・三一
—寅之日



郭・老甲・三四
未智(知)牝(牡)之合(股)怒(怒)

先述したようにやはり「戊」も水平である。また起筆の決定的な違いも見られる。更に文字の傾斜が右上がりにならないよう、最終画は反るように書かれており、これにより文字が正面を向くように工夫されている。

「子」



包二・一八五
五—搏 人名



九・五六・三四
生—



信一・〇三六
—是聞於

文形構造が類似している文字を確認することが出来たのであるが、一般的な楚系文字の多くは手の部分が二画で書かれている。この字形構造はやはり特異であり、その起筆は『保訓』の特徴が表れている。

「自」



郭・語三・一四
—視(示)其所不族,益



包二・二四六
—會鹿以帝(適)武王



郭・老丙・二
而百(青)(姓)曰我—朕(然)

「自」において字形構造が酷似している文字が見られた。しかし、他の楚系簡牘において字例の多いものは横画を右に下げて書かれているものが多数である。また、起筆に関して比較すると露鋒にならないようにしっかりと藏鋒で運筆されておりやはり特異である。

「已」



新乙一・二六、二
—巳之日



包二・四三
—亥

これまで度々述べてきたが他の楚系簡牘との起筆違いは明らかである。字形構造が類似した文字も多く見られたが、最終画の角度の違いは様々であり、上反りの形も散見された。

「丑」



包二・三七
己一之日



新甲三・二九九
癸一之四

字形構造の同じような文字は散見されず、一般的に字例の多い文字とは異質であった。また文字の傾斜は右上がりの字例が多く、この「丑」のように水平である文字は見られなかった。

第二簡

「日」



包二・一三一
陰司敗某執告湯公就軍言



郭・緇・二九
子一



帛甲四・二七
四一

字形構造は酷似していることがわかる。やはりこの文字においても文字の傾斜は明らかな差異があり、その決定的な要因は横画である。右下がりの画は楚系文字においてはそれだけで異質であるが、それによって文字の水平を保っている。

「發」



包二・一五〇反
容一釘



包二・八〇
既一等

これまで述べた起筆・水平に加え、明らかに字画の差異がみられる。これまでの文字とは別体であり、清華簡の他の篇とも異なる文字構造であった。「保訓」特有の文字である。

「疾」



望一・三九
足骨一、尚毋死



秦一・一
以其又一之古



包二・二四七
既腹心一、以正感(氣)、不甘似

字例の多い楚系簡牘の文字とは字形構造が異なっていることがわかる。一画目の画と点画の省略化があり、特異な文字である。しかし、横画を水平に書く独特の用筆法ではあるものの最終画は内に入るような円転の運動が見られ、楚系文字の特徴もみられる。

「甚」

包二・一五八

畢得弔爲右支於莫露之軍，死病

上(二)・魯・四
丌(其)欲雨或一於我

包二・一四九

與其滂一絲一賽

字形構造において最終画を極端に伸ばしており一般的な楚系簡牘と比較し、変化がある。

一画目、二画目の起筆の位置を同じ高さから書き始めており、横画は勿論であるが特別な意図を持って書いていたと推察できる。

「女」

包二・一四九

九・五六・一九下

一(如)巨(以)祭祀

多くの字例がある「女」字であるが、その楚系簡牘と比較するとその特異性は際立っている。右上がりの文字構造とは無縁の水平・垂直を意図した書きぶりである。縦画の収筆に向かい右に折れ曲がるような線は楚系文字では散見されない用筆法である。

「及」

郭・成・二七

上(二)・容・一三

乃一邦子

郭・成・二七

一其母(薄)長而尾(厚)重(大)也

他の楚系簡牘とは明らかに異なる筆画の繁化が見て取れる。特筆すべき縦画である。垂直に書かれており、その線によって水平を保っているのである。しかし丸みのある線や収筆の円運動は楚系文字の用筆法である。

第三簡

「昔」

信一・〇八七

郭・緇・三七

一才(在)上帝

新甲三・一一、二四

一我先出自廓逆

起筆、収筆といった用筆法の違いは明らかである。簡から出てしまった線から、抜き放ったような収筆ではなく最後まで力を抜かな

かつたということが推察できる。また「日」の部分では先述同様の用筆法が見られる。

「寿」



包二・二九三
繼—人名



郭・老甲・三
聖人之才(在)民—也

文字構造が類似する文字はあるがやはり、用筆法の違いが明らかである。藏鋒の重厚な起筆は他の楚系簡牘には見られない特異な用筆法である。また『保訓』でよく散見される縦画から右に折れ曲がる線が他とは異質である。

「人」



包二・四八
葬夫—

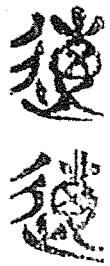
信二・〇一八
樂—之器

郭・老甲・二二
—法陞(地)

郭・五・二七
見取(賢)—

楚系簡牘において字例の多い「人」であるが、先述した通り縦画を右に向かって書いている『保訓』の文字は特異である。起筆部分はやはり藏鋒であり、打ち込みの強い入筆とは異なっている。

「連」



郭・老甲・二二
密曰—(連)



郭・尊・二八
速慮(手)楛(置)蚤(郵)而—(傳)命

字形構造が大きく異なっているが、やはりしんによる最終画の右下がりの角度である。

その他にも隣の部分の筆画に差異が見られるのである。この場合も対称を意識した形である。

「必」



包二・二六〇
一研—



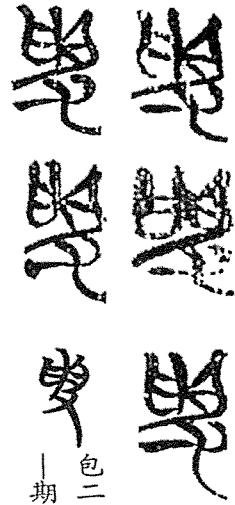
九・五六・三〇
女—出丌(其)邦



郭・老甲・三六
甚悉(愛)—大賢(費)

文字構造は酷似しているものであるが、これまで述べたように文字の傾斜の差異は一目瞭然である。また起筆に関しては鋭く尖った他の楚系簡牘と比べしっかりと入筆されている。この文字は『保訓』の用筆法を色濃く表しているのである。

「受」



包二・三三反

一期



望二・二二

紫綴一 綯結 □



包二・五六

喜君之司敗遠綱一期

『保訓』に見られる縦画から右に折れ曲がる線が特徴である。「又」の部分は楚系簡牘では二画で書く字例が多く散見されるが、「受」は皆無であり三画にて書かれている。字形構造がかなり特異な一例である。

「以」



包二・二二八反

一返郭



望一・一四

一穎蒙為忍固貞



郭・緇・二二

母一少(小)悞(謀)敗大情(作)

字形構造は類似しているものの明らかに入筆は異なっている。楚系簡牘の多くの字例の中には強く打ちこんだことにより藏鋒のように見えるような起筆はあるが『保訓』の起筆とは異なっている。少し湾曲する線であるが、『保訓』は字例のから意図的に書かれていることがはっきりと見て取れる。

「允」



郭・成・二五

一巾(師)淒(濟)惠(德)



郭・緇・五

佳(惟)尹一及湯威又(有)一惠(德)

字画を細かく精査した場合に他の楚系簡牘とは異なっている。しかし、楚系文字の字形から逸脱しているわけではない。『保訓』の起筆・水平といった用筆法で書かれている別体である。

「弗」



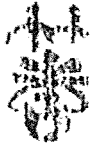
郭・老甲・一八
是以去也



包二・一三〇
左司馬邲虛—受

「弗」は楚系簡牘の字例が数多くある文字であるが、異体字が多く散見されることでも知られている。その中においてこの『保訓』の文字もまた筆画の繁化が起きている。清華簡の他の篇においてもこの繁化は見られるが、やはり水平に書かれているのはこの『保訓』の文字のみである。

「箸」



包二・八
司馬徒—之



郭・性・一六
—(書), 又(有)爲言之也

字体構造は異なっていることは一見してわかることであるが、この文字の特筆すべきは左右対称であるということである。楚系簡牘の字例では筆画の關係上左右対称にはなりえない文字であるが、この『保訓』の特異性を考えれば起こりうる事象である。水平を意図

するが故に対称に書かれたと推測できるのである。

・筆法

これまでの考察を踏まえ各項目にそれぞれの特徴をまとめる以下の通りである。

①起筆

楚系文字の起筆は露鋒が主であり、強く打ち込んだ先の尖った起筆、早書きのため細く尖った起筆が大半を占めている。この際に穂先のアタリが強く墨量の加減にも起因して、意図せずに藏鋒のようになった起筆はあるが、『保訓』においては起筆を、はっきりとした藏鋒で入筆している。明らかに差異が見取れるのである。

②横画

『保訓』の横画はそれまでの楚系文字の要ともいえる円転のリズムを一切感じることが出来ない。起筆での藏鋒の入筆のまま、線の太細をつけないよう慎重にかつゆつくりとした連筆となっている。少しの線の揺れはあるものの、一貫して水平を意識しているのだからか重厚で安定感がある。早書きの匆卒な書きぶりとは対極にあり、一般的な楚系文字に見られる反りかえるような線は見られない。

③収筆

楚系文字の特徴として収筆は起筆同様に先端に向かい細く尖っていくような運筆である。円転のリズムで弧を描くように抜きはらう独特の収筆であるため、線と線との結合部においては度々余白が発生する。しかし、『保訓』においてはしっかりと線が結合されており横画同様に力を抜かないよう運筆されているのである。「口」の部分が入っている文字に関してはしっかりと上部の横画が縦画二本と結ばれている。単純に縦や横に抜きはらうような収筆では極端に細くなりがちであるが、その中にある最後の収筆を軽く止めているような運筆が見られるのである。

④字体

『保訓』における文字の中には数文字、楚系文字では見ることの出来ないような文字が表れている。特に目を引いた文字は「隹」と「舊」である。どちらも鳥の金文の書体を髣髴とさせる書きぶりである。また「日」や「昔」といった文字の「日」部の中心の線が点になっている。

随所に楚系文字では見られない筆画が表れており、今後、楚系文字の新たな解釈に繋がっていくのではないだろうか。

おわりに

ここまでの考察をもとに『保訓』が他の篇や楚系簡牘に比べ、用筆法において特異性があることは明らかである。先述の内容から用筆法を変化させたという影響はあるであろう。しかし、その用筆法が一般的な楚系様式とはここまで明らかに異なった特異性が見られたことは楚系簡牘文字の中にも通用体のみならず公的な正式体の存在が考えられるのである。

私見ではあるが、この『保訓』には字形に水平の意識が旺盛で、戦国の秦石鼓文などに近い意識が散見している。今後の研究課題として比較的時代の近い他の列国との比較も必要となるかもしれない。楚系文字の新たな一面を模索したい。

参考文献

- ・『清華大学蔵戦国竹簡(壹)』
(清華大学出土文献研究与保護中心編・李学勤主編、中西書局、二〇一〇年十二月)
- ・『精華簡研究』(湯浅邦弘編、汲古書院、二〇一七年九月)、「清華簡(壹)」(陸)の字迹分類」(福田哲之)、「清華簡(壹)」(陸)所収文献解題」(草野友子、中村未来)
- ・『楚系簡帛文字編』(滕壬生編、湖北教育出版社、二〇〇八年十月)